靖国神社参拝の是非

2005 年 11 月 26 日
経営学部　F105294　船橋　真

（1）　問題の背景

10 月 17 日に小泉首相が通算で 5 度目となる靖国神社参拝を行った。この参拝は中国や韓国など近隣諸国から強く反発されており国内でも小泉首相の対応が騒がれていたが、首相は「年１回参拝」の公約を優先した。しかし今回の参拝は過去４度の参拝とは違い、一般参拝客同様に本殿には上がらずに拝殿の前で手を合わせるのみであった。

この参拝により前々から参拝自粛を求めていた中国や韓国など近隣諸国は、首相がこうした反対を押し切った形で靖国参拝を行ったために両国が反発し、外交関係にも影響を与えることになった。

（2）　報告の目的

今回で 5 度目となる靖国神社参拝は、多くの問題をのこしておこなわれた。近隣諸国や、野党各党などから多くの批判・反発をうけながらおこなわれた靖国参拝は本当に意味があったのか。そして、これからの中国や韓国との外交関係はどうしていくのか。そもそも靖国神社の本質は。靖国参拝について賛成派・反対派の意見もふまえて、これから靖国神社参拝を行なっていくことは、望ましいのか、望ましくないのかを検討していきたいと思う。

（3）　対象とする問題の概要[1)]

１．靖国神社とは

明治政府が１８６９年に「東京招魂社」として建設し、１８７９年に靖国神社と名前をかえた。戦後、連合国軍総司令部(ＧＨＱ)の「神道指令」[1)]によって国家神道[2)]が廃止されて一宗教法人となった。明治維新から太平洋戦争までの戦死者、計２４６万６５３

２人がまつられている。そのうちＡ級戦犯[3)]は 78 年に合わせまつられた。

２．なぜ靖国参拝問題がおこったか

靖国神社の参拝問題は、まずＡ級戦犯が靖国神社に合わせまつられたことと政教分離[4)]の問題が国内の問題としてあり、その上で現在の中国や韓国が問題としている「靖国に参拝することに対する、日本政府の政治姿勢の問題」が発端となっている。

３．これまでの靖国神社参拝について簡単な経歴[II)]

2001 年 8 月 13 日

→小泉首相参拝。参拝を反対する立場からは参拝した事への、参拝を支持する立場からは終戦記念日を避けたことへの批判もあがった。

2002 年 4 月 21 日

→小泉首相参拝。近隣諸国、各野党からも批判。

2003 年 1 月 14 日

→小泉首相参拝。昨年と同じく近隣諸国、各野党から批判。

2004 年 1 月 1 日

→小泉首相参拝。同年 4 月 7 日、福岡地方裁判所は小泉首相の靖国参拝について、政教分離違反で憲法違反だとしめした。

2005 年 10 月 17 日

→多くの反対を押し切り小泉首相参拝。これまでの参拝とは違い、記帳はせず、一般の参拝者と同様に拝殿の前で参拝。

（４） 靖国参拝に対する賛成派、反対派意見と検討[III)IV)]

小泉首相の靖国神社参拝によって賛成、反対それぞれの反応があり、多くの意見がとびかった。ここでは、その両意見について検討したい。

＜賛成派意見＞

- 靖国神社は国のために亡くなった方々がまつられている所であり、そのため国の代表である首相が参拝するのは当然である。
- 中国や韓国などの諸外国に、首相の靖国神社参拝は先の大戦の肯定やＡ級戦犯を敬うことではなく、今後の平和を祈るためとの理由を積極的に

つたえてほしい。

- 右翼的な意見だが、戦没者に敬意と感謝を表すのは日本人として当然。今の日本があるのは、日本のために戦った戦没者たちのおかげであるから。
- 参拝を続けるのは首相としての責任。

→賛成派意見のまとめとして、そもそも靖国神社には国のために自らの命を落としてまで他国と戦った方々がまつられており、その方々のために敬意と感謝を表す参拝をおこなうのは首相の前に日本人として当然である。また参拝の目的を近隣諸国に積極的に伝えることは、確かに大事だ。そのように参拝目的を伝えたとしても近隣諸国は受け入れてくれるかわからないが、少しずつでも努力することは日本にとってきっとプラスになるだろう。

＜反対派意見＞

- 国際的な反発を招き、信頼を失う。そうなると今後の国交正常化問題などがさらに悪化し、近隣諸国との関係が薄れていく。
- 戦争責任者に手を合わせるのは反省のなさのあらわれ。戦争だったとはいえ、多くの人を殺していた人たちに手を合わせるということは、反省がないと思われ、近隣諸国からの怒りをかうことになる。
- 首相の「二度と戦争しないための参拝」という言葉はしらじらしく聞こえ、日本は戦争ができる国になってきており、参拝は「これから戦争をする」と言っているようなもの。
- 政教分離違反で憲法違反だ。小泉首相が特別に靖国神社を支援していると見られ、政治が靖国神社に加担しているようにも見ることができるため。

→反対派意見のまとめとして、やはり国際的な反感をかうという意見が多かった。特に近隣諸国は靖国神社参拝について前々から反対していただけに、この参拝で日中・日韓の関係に多少なりと亀裂がはしる心配をしている。そして、小泉首相の言動はあまり信用できないという意見や、司法が憲法違反と判断した直後の参拝だったため憲法を無視しているという意見もあった。このような意見から、小泉首相の信頼が近隣諸国からだけではなく日本の国民からもだんだんと薄くなっていきそうである。

（５）近隣諸国の反応[III)IV)]

小泉首相の靖国神社参拝についてもともと反対していた中国など近隣諸国も、この参拝により様々な反応をしめした。

<中国>

●中国の駐日大使は、靖国神社参拝を受けて中国政府はどんな時期・形式の参拝であっても断固反対すると批判。さらに、首相は日中関係を損なった歴史的責任を必ず負わなければならないと強調した。
●中国各地では、前々から予想されていたとおり反日デモがおこなわれた。
●小泉首相の靖国参拝にともない日中外相会談を拒否。
●台湾の総統は小泉首相が国のために命を落とした方々をまつる靖国神社を参拝したことは当然のことだと肯定的な意見を表明した。

中国ではどんな状況においても靖国参拝については、断固反対であった。反日デモや日中会談の拒否など、日本に対して多くの不信感をいだいた。もともと心配されていた日中関係もさらに冷え込むことになりそうである。これからの小泉首相の対応に期待するしかない。しかし少数派として台湾のように小泉首相の行動を理解してくれる意見もあった。

<韓国>

●韓国の外交通商相は小泉首相の靖国参拝をうけ、韓日関係を悪化させる最大の原因は靖国参拝であると言っても過言ではなく、参拝の強行に失望を感じると強く抗議した。
●韓国市民がソウルの日本大使館前で抗議行動をおこなった。
●韓国外相が１０月に予定それていた訪日を中止。

韓国では靖国参拝において政府だけではなく国民も失望感をいだいた。なぜなら日本の過去の歴史問題を未来志向で解決していこうと努力している状況だったからである。そして今年は日韓友情年であり、このような状況でおこなわれた靖国参拝により、日韓関係もまた心配される。

（６）総合的な検討

総合的な検討として、まず靖国神社参拝についての賛否両論についての意見。この二つの意見を比べると圧倒的に反対意見の方が多かった。それは小泉政権に対する不信感が近隣諸国をはじめ、野党や国民にまで広がっていることを物語っている。国内で特に問題になっているのは近隣諸国などの国際関係についてであった。国際関係については、（５）で述べたように中国・韓国で政府をはじめ国民からも失望感を与えてしまい、ずっと問題になっていた日中関係・日韓関係に、また大きな亀裂をいれてしまった。これからもアジアの一国として近隣諸国と友好を結んでいくためにも、この問題を早期解決していく必要があるだろう。そして賛成意見に関してから、靖国神社は国のために命をおとした人がまつられている所であり、たとえＡ級戦犯がまつられていたとしても政治とは無関係に考えたほうがいい。だから小泉首相が参拝することは当然である。ただ小泉首相の行動は国際関係を左右するためもう少し慎重に行動する必要がある。そしてもしこれから参拝をするならば、参拝理由として今後の平和を祈るということを近隣諸国に伝えていくことが大事であろう。次に国際関係としては、上でも書いたようにどう近隣諸国との関係を修復していくかが問題になっている。特に中国では靖国参拝により反日デモなどがおこり、前にもまして国交正常化は難しくなった。そのような中でこれからの小泉首相の一つ一つの行動が注目されるであろう。韓国では、今回の参拝により多少なりと不信感を抱かせてしまったが、数年前におこなわれた日韓共催のワールドカップや、ヨン様ブームなど国民から韓国とのつながりがあり、少しずつその距離を縮めていくことがこれから重要になっていくだろう。
まとめとして小泉首相は今後とも靖国神社参拝を続けると表明している。このようにたくさんの問題がでているなかで、また参拝を行うのは危険であり、また多くの問題がうまれることだろう。そのため今回のように多くの問題を生まないためにも、日本国民の不信感を解消するためにも、近隣諸国との国交正常化につとめるためにも、**今後の小泉首相の靖国神社参拝はのぞましくない。**という結論に至った。

（７）私見

靖国神社参拝について、今後の小泉首相の靖国参拝はのぞましくないことに至ったが、正直僕は賛成派である。賛成意見にも述べていたが、国のために死んでいった人たちに感謝の念をこめてまつることは人として当然だと思った。そしてこれからの平和を祈っ

ているのにどうしてこんなにも問題がおこるのかずっと疑問だった。今回このレポートをとおしていろいろな意見を知り、靖国神社を参拝することはそんなに単純なことではないことを知った。靖国神社には歴史があり、それを取り巻く政府や近隣諸国。多くの問題が発生しても当然である。そんな中で小泉首相はたくさんの批判をあびながら靖国神社を参拝したことは正直すごいと思った。これから日中・日韓の関係はどうなっていくのか、いろいろ不安ではあるが小泉首相を信じて少しずつでも国交正常化につとめていってほしい。いつの日か、なんの問題も起きずに誰でも靖国神社を参拝できる日がくることを願いたい。そしていつか自分も実際に靖国神社に行って参拝したいと思う。

（８）参考文献

(Ⅰ)靖国神社（http://www.yasukuni.or.jp/index2.html）

(Ⅱ)ｳｨｷﾍﾟﾃﾞｨｱ　フリー百科事典（http://ja.wikipedia.org/wiki/）

(Ⅲ)Yahoo!ニュース（http://headlines.yahoo.co.jp/hl）

(Ⅳ)中日新聞（靖国神社参拝の記事）

（９）注

（注１）　神道指令・・・１９４５年１２月にＧＨＱが日本政府に発した、国家神道の禁止と政教分離の徹底的な実施を命じた指令。

（注２）　国家神道・・・明治維新後、神道国家強化政策によりつくられた国家宗教。天皇を現人神(あらひとがみ)とし、天皇制支配の思想的支柱となった。

（注３）　Ａ級戦犯・・・第二次世界大戦後に連合国が訴えた日本の重要戦争犯罪人の呼称。

（注４）　政教分離・・・信教の自由を保障するために、政治と宗教が相互に介入し合うことを禁止すること。日本国憲法では厳格な政教

分離の原則を採用していて、国や地方公共団体が給与したり、自ら宗教的活動を行ったりする事を禁止している。(憲法 20 条・89 条)